

# さくらんぼとアラキー

平成 27 年 8 月

沼尾 利郎



山形のさくらんぼ

## 1 さくらんぼ

山形のさくらんぼが好きです。毎年6月になると、知人から教えてもらった農家へさくらんぼを注文して「お取り寄せ」しています。以前は外国産のチェリーも食べていたのですが、甘みと酸味のバランスが絶妙な「佐藤錦」を食べてから、他のものを食べる気がなくなりました。「さくらんぼの生産は受粉や収穫などすべて手作業であり、さくらんぼの実は傷つきやすく鮮度が保ちにくい貴重な果実である」と知ってからは、1個1個ありがたく生産者の方に感謝しながら食べています。

子供のころはスイカでもリンゴでもミカンでも、それこそいくらでも食べられたのですが、50代も後半になるとそんな元気はもうありません。「このおいしいフルーツをあと何回食べられるのだろうか」と神様仏様(?)に感謝しながら食べている自分に、我ながら驚いている次第です。「小さなことをありがたがる」とか「少しのことでも感謝したがる」のは、老化の立派な証拠かもしれませんね。老化を否定するアンチエイジングという考えがありますが、私は年齢相応にこころや身体が変化するのは自然なことと受け止めています。鮮やかなルビー色に輝く山形のさくらんぼは、初夏だけの味わいとしていつも私を幸せな気分にしてくれるのです。



土門拳記念館（外観）



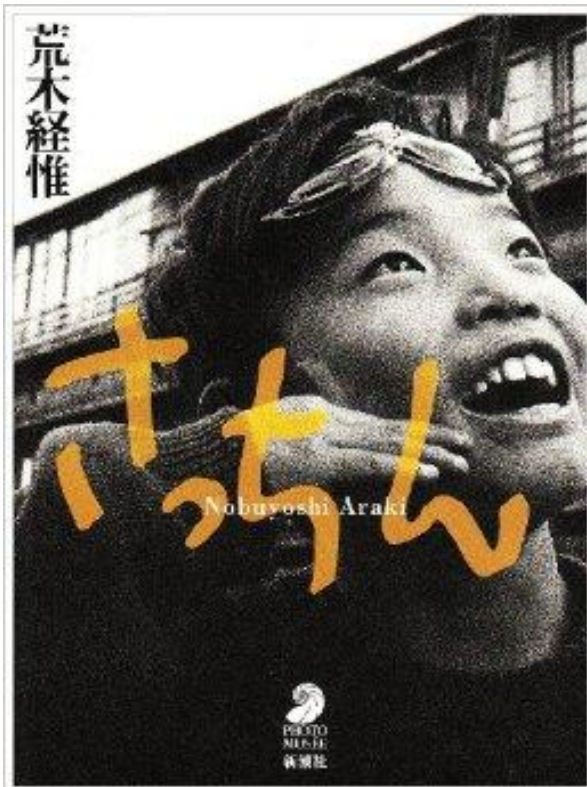
土門拳記念館（庭園）

## 2 土門拳記念館

山形と言えば、庄内地方の酒田市郊外にある土門拳記念館（日本初の写真美術館）を最近訪れました。記念館は広々とした公園内にある立派な建物であり（日本芸術院賞受賞）、華道草月流三代目家元の勅使河原宏による庭園、彫刻家イサム・ノグチによる中庭設計、グラフィックデザイナー亀倉雄策の銘板など、記念館のいたる所に高い芸術性が感じられました。土門拳は戦後日本を代表する写真家の1人であり、リアリズム写真を確立した写真界の巨匠として、「古寺巡礼」「室生寺」「ヒロシマ」「文楽」など多くの作品を残しました（土門拳という凄味のある名前も巨匠にふさわしいですね）。昭和という激動の時代にあって、写真家の気迫が痛いほど伝わってくる作品群はどれも素晴らしいのですが、私が印象的だったのは「筑豊のこどもたち」の表情でした。1950年代に撮影されたこの作品は、炭鉱街の貧困や父子家庭の幼い姉妹の姿など、社会的に重いテーマに対する土門のメッセージがストレートに伝わる内容であり、寂しさや悲しみに耐えている子供たちの表情が何ともせつなくて、心にしみるような作品でした。「写真は肉眼を超える」という言葉を土門は残しましたが、レンズを通して真実の姿や物事の本質に迫ろうとする写真家の強い主張にただただ圧倒されました。



土門拳の昭和



さっちゃん (荒木経惟)

### 3 アラーキー

子供の写真といえば、アラーキーこと荒木経惟（あらかきのぶよし）が昭和30年代の東京下町の子供たちを活写した「さっちゃん」も好きな写真の1つです（第1回太陽賞受賞）。アラーキーは過激なヌード写真で有名ですが、「さっちゃん」の中の子供たちはどの顔も懐かしく、たくましく、時代の匂いや空気感を鮮やかに感じさせるものです。「かわいい」とか「豊かな表情」というような“きれいな言葉”とは明らかに違う土着のエネルギーが感じられ、「どうしたらこんな表情が撮れるのか？」と思うほど生命力にあふれた子供たちが写し出されています。子供たちの生命力に負けないだけのエネルギーが写真家にないと、これだけの作品は撮れないでしょう。

アラーキーには、愛する猫と暮らした日々を収めた「愛しのチロ」という作品もあります。そこには単にかわいい表情やしぐさだけでなく、動物の本能が見える姿やヨーコ夫人が入院し

て寂しくなった雰囲気を感じさせるうしろ姿など、何気ない日常風景なのになぜかジーンとくるんですね。「チロは本当に愛されていたんだなあ…」としみじみ思いました。

写真には“情”が写る (アラーキー)

「愛する思いがあれば、いい顔になる」とアラーキーは言います。山形のさくらんぼも子供たちの写真も、生産者や写真家の深い愛情があるからこそ出来上がった作品が消費者や鑑賞者に感動を与えるのでしょうか。さくらんぼも子供たちも、本当にいい顔をしていました。